

さいごの琵琶盲僧 永田法順師の全釈文(シャクモン)および 檀家回りの音響映像を通しての盲僧業の解明に関する研究

研究年度・期間：平成17年度

研究ディレクター：中山 一郎
(教養課程 教授)

共同研究者：高梨 欣也 (放送学科 教授) 小堀 豊子 (放送学科 教授) 奥原 光 (演奏学科 助教授)

学外共同研究者：小島 美子 (国立歴史民俗博物館 名誉教授) 柳田 益造 (同志社大学工学部 教授) 薦田 治子 (武蔵野音楽大学音楽学部 教授) 川野 楠己 (元 NHK チーフ・ディレクター) 正見 満 (關アド・ポポロ社長) 山田 真司 (金沢工業大学情報フロンティア学科 助教授)

1. 研究の背景と目的

日向琵琶盲僧 永田法順師*は、昔ながらに琵琶を背に檀家(約970軒)を一軒ずつ訪ね歩いてご祈願を行い、琵琶の弾き語りで「釈文」(しゃくもん。仏教説話や教えをやさしい口語体で説く叙事詩)を吟ずる、我が国「唯一」(恐らく、「さいご」)の琵琶盲僧である。(*: 宮崎県延岡市・天台宗長久山浄満寺十五世住職。2001年2月「延岡市無形文化財」指定、及び2002年10月「宮崎県無形文化財」認定。1935年9月生まれ。)

このような、いわゆる芸術家や演奏家とは明らかに一線を画する在野の宗教者である琵琶盲僧の演唱については、これまで音楽史や宗教史等の立場から、主として文献学的な研究がなされてきたに過ぎず、釈文、及び檀家回りの音響映像(音と映像)を通して盲僧業の全貌を解明することに関しては、全く不十分にしか行われてこなかった。従って、琵琶盲僧の存在自体が無くなるのではという危機的状況にあっては、この現状は誠に憂慮すべき事態であり、まずは、その演唱、及び盲僧諸業を高品質なデジタル音響映像によって記録・保全することは、現在が最後の機会であると考えられ、学術的にも文化的にも急務である。

このような背景のもとに本研究は、さいごの琵琶盲僧といえる永田法順師の全釈文、及び四季を通しての檀家回りの音響映像を収録することによって、盲僧業の全貌を記録・保全し、それを基に盲僧業の全容を明らかにすることを目的とする。

このように、盲目であるが故に文字を持たず、従って、盲僧自体による諸業の記録が殆ど存在しない現状にあっては、今回の音響映像による記録・保全が最善、かつ緊急を要することであると考えられ、本研究によって得られる成果の学術的・文化的意義は大きいものと期待できる。

2. 盲僧諸業の音響映像収録

琵琶盲僧の諸業は、主として「檀家回り」(回檀法要。ご祈願と、それに続く釈文の弾吟)

と「カマド祓い」や「地鎮祭」などの「お祓い」に大別される。(注:「お祓い」は神主が行うのが通常であるが、永田師が檀家回りをする地区では琵琶盲僧が行うという貴重な伝統が現在も残されている。)

申請者はこれまでに、以下のような演唱、及び音響映像の収録を行ってきた。

- 1999年3月、10月、2000年3月(計3回):永田師の口頭伝承する全釈文(11曲)及び「地神経」等の経文を、延岡市・浄満寺において高品質なデジタル器機を用いて録音。
- 2003年12月:「冬季」の檀家回り、早朝の本堂でのお勤め、及び楽器「琵琶」の撮影。
- 2004年2月:寺に檀家が一堂に会して新年を祈願する「星祭」の撮影。
- 3月:檀家と地区の水の神を祭る「水神祭り」(岡元地区)の撮影。
- 4月初旬:「春季」の檀家回りの撮影。
- 4月下旬:「カマド祓い」(北方町)の撮影。(古いカマドを取り壊して新築する際の「カマド祓い」の、現在では数少ないチャンスに恵まれ、貴重な映像を収録できた。なお、「カマド祓い」や「地鎮祭」などの「法要」では御幣が重要な役割を果たすが、盲目の永田師が左指を物差し代わりにして小刀(右手)で御幣を作成する技は、見事という他ない。)
- 5月:「地鎮祭」(北方町)の撮影。(新築予定地の真ん中に座して地神に祈るそれは、普段見慣れた、神主が執り行うものとは随分と異なるものである。)
- 8月:「夏季」の檀家回り、及び「地鎮祭」の撮影。(今回の「地鎮祭」は、台風接近下の土砂降りの中、テント内で執り行われたが、永田師は何一つ省略されることもなく、普段通りにお祓いを終えられた。このことに施主は痛く感動されていた。このような檀信徒との信頼関係があつてこそ、盲僧業が継承されているものと推察される。)
- 9月:「川じまい」(細見地区/五ヶ瀬川堤防)及び「カマド祓い」(北方町)の撮影。
- 10月:「秋季」の檀家回りの撮影。(また、檀家(米田金蔵氏/前野町)と永田師の兄のそれぞれに長時間のインタビューを行い、永田師の盲僧業や人となりを語っていただいた。)
- 2005年2月:「星祭」の撮影。

そして、本年度は次の撮影を行った。

- 2005年7月:「夏季」の檀家回りの撮影。
- 10月:「秋季」の檀家回りの撮影。
- 2006年2月:釈文の琵琶の手(弾法)及びその伝習風景の詳細なる撮影(伝習者:角美弥子氏(東京芸術大学大学院博士課程))。(また、永田師の新しい琵琶を製作中の海野唯夫氏の工房を訪れて、琵琶の製作過程を撮影した。)

以上のように、本研究によって初めて、最後の琵琶盲僧といわれる永田法順師の全釈文の演唱、及び四季を通しての盲僧諸業の全貌が、高品質なデジタル音響映像として記録されたわけであり、日本の音楽文化の基層の一つが確かな姿をとどめたという意味からも、その学術的・文化的意義は極めて大きいものと考えられる。

3. 音響映像を通しての盲僧業の解明

このようにして得られた録音・音響映像を基にして、盲僧業の解明を、これまで永田師と各々の専門研究分野で関わってこられた、川野楠己氏（元NHKチーフ・ディレクター／視覚障害者の伝統文化専攻）、小島美子氏（国立歴史民俗博物館名誉教授／日本音楽史専攻）、薦田治子氏（学外共同研究者／武蔵野音楽大学教授／琵琶楽専攻）と共同して行った。その結果、次のような成果が得られた。

- ・もはや永田師ただ一人しか語ることが出来ない全11曲もの釈文の「字起こし」（詞章起こし）を行った（全11曲：『神名帳』『琵琶の釈』『五郎王子の物語／初段・王子の釈』『同／二段目・文撰段』『同／三段目・四方立』『同／四段目・装束立』『釈迦の段』『ひきひろめ』『法楽』『荒神揃え』『神送り』）。これまでも東京での公演プログラムにはごく一部の「字起こし」はされているが、本研究のような全11曲もの字起こしは初めてであり、これからの釈文研究の第一級の基礎的な資料となるものと考えられる。
- ・檀家回りにおける法要の構成を系統立って明らかにした。即ち、はじめの作法 袂い 釈文（各種お袂いでは、読経） 終わりの作法、の順番で行われ、その全ての音響映像を収録できた。
- ・琵琶盲僧はどのようにして誕生したのか、それは琵琶法師とどのように違うのかを、楽器学の観点から明らかにした。即ち、琵琶盲僧とは、当道座による盲人たちの一元支配に抗したために、音高が自在に出せる新楽器である三味線を弾くことを禁止され、やむなくこれまでの琵琶の柱（じゅう、フレット）を高くすることによって、いわば三味線の代用品として「盲僧琵琶」という楽器を新たに編み出さざるを得なかった、九州を中心とする琵琶法師のことである、ということを明らかにした。盲僧琵琶を分水嶺として、それ以前の楽琵琶、平家琵琶の柱は低く、それ以後の薩摩琵琶、筑前琵琶の柱が高いのはそれ故である。
- ・盲僧琵琶は、神道も仏教も修験道も陰陽道も、さらには火の神、水の神、地の神など民間信仰的なものも取り込んでいて、それらが矛盾することなく自然に和み合っている世界であること、そして永田師の盲僧諸業にそれが典型的にあらわれていることを音響映像を通して明らかにした。

4. 全集『日向の琵琶盲僧 永田法順』の刊行

これまでに得られた成果を統合して、全集『日向の琵琶盲僧 永田法順』を2005年9月に刊行した（CD6枚、DVD1枚と写真集で構成。中山も4名の編者の一人。発行所：(株)アド・ポポロ）。その結果、全集中のCDで平成17年度（第60回記念）文化庁芸術祭大賞（レコード部門）を受賞した。受賞理由は次の通りである。「現在も日常活動が続ける唯一の琵琶盲僧・永田法順の音楽世界をとらえた貴重な記録。長期間にわたる取材により、お袂いでの読経、檀家回りで唱える11曲の釈文など、琵琶盲僧の口頭伝承がきわめて良質の音響で収録され、字起こされた詞章と解説、写真集・映像記録とともに、日本の音楽文化の基層の一つが確かな姿を

とどめた。」(平成 17 年度芸術祭総覧、文化庁、2006 年 3 月)

このように、本研究で得られた成果の学術的・文化的意義は極めて大きいものと考えている。